

小林トコ



わが町・浦安



わが町・浦安

小林トミ

新宿書房

わが町・浦安
まち　　うらやす

発行日——一九八三年一月三〇日　第一刷

著者——小林トミ　◎*Tomi Kobayashi, printed in Japan, 1983*

発行者——村山恒夫

発行所——新宿書房　東京都千代田区九段南四六―三七〇―二―一〇二
電話東京二六三局二六一〇番　振替東京七―一二四九七

印刷所——理想社印刷所十栗田印刷

製本所——松岳社青木製本所

定価——一六〇〇円　0095-037017-3335

乱丁・落丁本はお取りかえします

表紙の地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の二万五千分の地形図を複製したものである。
(承認番号) 昭五八開復 第六八四号

わが町・浦安
目次

その町……………6

勲章男……………27

花道じいさん……………43

たき子……………58

ラバウル健……………73

あやしき奴……………80

ブラックばあさん……………93

ガンちゃん……………108

アチャヤン……………122

おかねさん……………137

日なし金融の男……………157

こうもりなおし……………170

栃木屋酒店……………182

ちちやび竹さん……………195

あとがき……………207

絵 小林トミ
装丁 田村義也

わが町・浦安

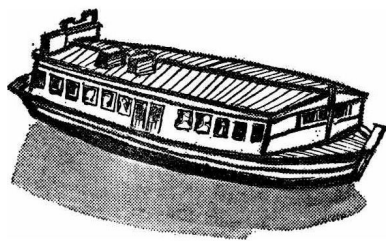
その町

その町は不思議な町だった。

町の中心を川が流れ、川に沿って小さな家がぎっしりと立っている。川にはベカ船や大きな船がつかないであり、船の通るすきまもないくらいだ。船で川を下ると海にでる。東京湾の一番奥で、いろいろな魚や貝類に恵まれている。海に近づくにつれ、田圃や畑がひろびろとつづき、右手に弁天さまの鳥居がみえる。

その町の人びとは、漁業や農業、それに東京に魚や貝を売りにいって暮らしていた。

細い道路は人通りが多い。家が狭いせいか、外で話したり、仕事をしたりする。町全体に人が多く、活気にみち、朝早くから夜おそくまで、人声や貝がらをふみしめて歩く音がきこえている。



なみ子がこの町にはじめて足をふみ入れたのは、昭和九年の春だった。

その頃、交通機関は、東京の高橋^{たかばし}まで通うポンポン蒸気船とバスにたよっていた。ポンポン蒸気船は白と青のペンキにぬられ、大川端からでている。なみ子はポンポンという音をきくと、心がおどった。

朝早く大川端から蒸気船に乗ると、朝もやをつけて江戸川を走る。兩岸が土手で、右側に島がみえ、朝もやの中に川岸の家がぼんやりと浮かび、川の水にうつって、ゆらりゆらりとゆれる。江戸川の水は飲料水になるほどきれいな水で、蒸気船の窓からみるとゆつたりと流れている。長い水路を走るあいだ、船のなかではキザミ煙草を吸う売^うっ人の老人たちの話声で賑わう。売っ人でも、若い人たちは自転車に乗って売りにいくので、蒸気船に乗る売っ人は老人や女が多い。また、船には東京に通う学生や会社員も乗る。深川方面に通う学生が多い。

蒸気船は乗場で客をひろ^{ひろ}っていく。ゆつたりと水路を下ると、だんだん工場街にでる。工場の裏側はゴミゴミしてきたない。煙突がそびえたつ工場街をぬけると、やがて兩岸にびょうぶのように家々が立ちならぶ。川に面した家々は朝の支度で忙しい。

東京の忙しい一日がはじまる頃、ポンポン蒸気船が終点の高橋につく。この蒸気船は、町の人が東京にでるのにつかわれるのと同じように、東京からいろいろな人を運んでくる。町には活動写真を上映する劇場は二つある。町の中心にある大きい方を「劇場」といい、小さい方を「貝がら亭」といった。劇場の方は四本立てとか五本立てで上映で、貝がら亭の

方は活動写真も上映するが、浪曲が主である。両方とも疊敷きで小便可さい。風呂屋にいくと、劇場の方は活動写真のポスター、貝がら亭の方は寿々木米若、浪花亭綾太郎、木村友衛、広沢虎造などの顔写真のついたポスターが貼ってある。

風呂の中で、男湯の方から浪曲をうなる声聞きこえるほど、この町には浪曲ファンが多い。貝がら亭は建物は古いが、東京の浪曲師たちのあいだで、「あの町で野次られるのは恐ろしい」とか、「新人のうちにあそこで野次りたおされて立往生し、浪曲師をやめたのがある」と恐れられていた。浪曲ファンが多いから、きびしい野次がとぶ。

浪曲師たちは緊張して、高橋から蒸気船でこの町にやってくる。評判がいいと、「これで浅草でもがんばれる」と心ゆたかに帰っていく。

ひとさまざまなおもいをのせて、蒸気船は町と高橋のあいだを何回も往復した。

バスは貝がらの町から本八幡ゆきが通っていた。バスを途中でおり、今井橋を渡ってチン電車に乗って都心にでる方法がある。町の人たちは、この二つの交通機関を利用して、外部とのつながりをもっていた。

昭和十五年には、町と東京を結ぶ、江戸川と妙見島にかかる橋ができた。町のひとたちの念願の橋である。町中で橋の竣工を祝い、盛大な祝賀会がおこなわれた。

やがて、東京から青バスが乗りこんできた。人びとは便利な青バスを利用するようになり、蒸気船の方は乗客が少なくなつて、いつか姿を消した。そして、町の様子も少しずつ変つてきた。東京に通う人も多くなつた。

なみ子の家は、町の中ほどにある六平太長屋のまんなかにあった。その日、なみ子は父の声で目がさめた。

まだ外は暗い。

父は戸をあけて、たる屋のおじいさんに声をかける。

「おじいさん、今日の天気はどんなものでしょう。晴れますかね。なにか、曇っているようですがね」

「いや、見せえ、東の方が少し晴れあがってきたから、だんだん天気はよくなるよ」

「ああ、そうですか、おじいさんの天気予報はあたりますからね」

「そうよ、俺も伊達^{だて}に年をとっちゃあいねえよ。浜できたえたから、天気がわかるんだ。ほら、東の方の雲がちいっとずつきれてきたからよ。大丈夫だよ、天気はよくなんよ」

「じゃあ、市がひらけますね」

父の明るい声がする。

なみ子はぼんやりとねぼけた頭で思った。「ああ、今日は市だった。だから父ちゃんは早くおきたんだ。天気がよければ、人出が多いかも知れない。日曜と市が重なったんだから……」

父はおじいさんの天気予報をきくと、嬉しそうに家の中に入った。冷たい風が入ってくる。

家の中は、下駄や鼻緒でいっぱいである。

この町になみ子の一家が住みついた頃、母は「ひどくいやな町にきてしまった」となげいていた。生まれたところから遠い、身寄りのない町で、心細かったのだろう。だが、次第に貝や魚の匂いに親しみを感じるようになったらしく、あまりこぼさなくなった。

母は狭い台所で朝飯の仕度をしている。トントンと大根をきざむ音をききながら、なみ子は「さあ、今日はいそがしくなるな」と思った。だが、なかなか床からはなれられない。父はたる屋のおじいさんの天気予報をきいて、すっかり気分がよくなったらしい。「さあ、今日はいそがしくなるぞ。早く、みんなおきろ」といって、姉やなみ子をおこした。なみ子はねむい目をこすりながら、「今日の市で何を買おうかな」とわくわくし、父の商売がうまくいくといいと思った。

市は町の中心にある大きな寺の境内でひらかれる。毎月、八日、十八日、二十八日にひらかれるので、三八さんぱちといわれていた。

この市のために、父は花川戸からいろいろと仕入れてきている。短い時間で数多く売るため、下駄に鼻緒がずけてある。黒いぬり下駄に赤いビロードの鼻緒、桐下駄に緑色の鼻緒、竹の皮をはったぬり下駄に絹天きぬてんの鼻緒をつけたなどが用意されている。

父は食事が終わると柳行李のなかに一足ずつ下駄をならべていれる。行李を二つ自転車の荷台に積みかさね、その上に鼻緒を入れた大きな風呂敷包みを載せる。自転車が倒れそうなくらい高くなった。用意ができると、「早くいい場所をとらないと」といいなが

ら、自転車をひいて出ていった。

父は、自転車に積めない荷物をあとで持ってくるようになみ子にいった。鼻緒の入った風呂敷包みである。「市に何か持っていくのは嫌だな」と思った。でも、父の自転車が倒れそうなので、しぶしぶひきうけた。手に持つとかなりかさがあったが、重たくはない。

「母ちゃん、小づかい」というと、母はだまって五銭をくれた。なんとなくゆたかな気持ちになる。

なみ子は大きな風呂敷包みをさげ、「もう父ちゃんは店を出したかな」と思い、なるべく早く市のたつ寺までいかなければと、家をでた。

重い風呂敷包みをさげたなみ子をきく子がみつけ、

「なみちゃん、どこにいくのかよ」

と声をかけた。

「うん、今日は市だから父ちゃんとこに鼻緒を持ってくんだよ」

「ああ、父ちゃんのどこにいくのか。じゃあ待ってせよ。一緒にいくべえ。荷物を持ってるやんから……」

なみ子は内心ほっとした。一人でなく、二人で風呂敷包みを持てば、そんなに恥しくない。

きく子と一緒に風呂敷包みをさげると軽く感じる。歩きながら、「きくちゃん、今日は

市で何を買うの」ときいた。きく子は、「えーと、おっかあから小づかいを貰ったから、何を買うか、わくわくしちゃうよ」という。なみ子も「何を買おうかな」と、いつもより多い小づかいの入ったがま口をふところに入れ、期待で胸がふくらむ。

寺に近づくと、人通りが多くなる。入口には、「今によくやるや」の牛どん屋が屋台を持ってきて七輪に火をおこしている。色白のおばさんは忙しそうである。

寺にいくと、店をだす人たちは世話役に場所をきめてもらう。場所がきまると、世話役の山田さんからムシロを借りる。寺の中は屋台や店を出す準備でいそがしい。山田さんが忙しそうに歩きまわっているのを見て、なみ子は「ああ、山田さんだ。父ちゃんの場合はきまっただけかな」と思った。

人混みをぬっていくと、父の場所は本堂の裏手で、ムシロの上にゴザをしき、鼻緒や下駄をならべている。隣はいつものようにはしぎれ屋が顔をだしている。はしぎれ屋のおじさんは、前の日に蒸気船で来て宿屋に泊っている。大きな風呂敷包みをあけ、洋服のはしぎれをならべている。市の帰りになみ子の家によく寄って話しこんでいったから、なみ子を見てにこっと笑った。

父はこれからの人出を予想して、あわただしく準備をしている。前の方に格安の下駄をならべ、奥の方に桐下駄をならべている。

行李のなかには上等の本天^{ほんてん}の鼻緒が入っている。気むずかしいお客がきて、「いいものがない」などというので、いつも用意しておく。だが、あまり売れない。市でよく売れる

のは、水仕事に便利な安下駄で、ビロードの鼻緒のがよく売れる。

父の前には安下駄がならべられていた。

なみ子は学校の友だちにみつかるのがいやなので、風呂敷包みをおくと、いそいで父のそばをはなれた。はしぎれ屋のおじさんに、「あれ、もう帰るのかい」と声をかけられた。「うん」とあいまいな返事をする、いそいで寺の前の方に行った。寺の本堂の前に大きな水の入った手洗いがある。ここで、なみ子はきく子と時間をすごす。

寺の境内は広い。この寺にはなみ子の一、二年のときの担任の先生がお嫁にきていた。先生がいまいかとまわりをうろうろするが、本堂の横の黒い屋根の下にいるらしく姿が見えない。

なみ子ときく子は本堂におまいりをした。お賽銭はあげないが、きく子もまじめな顔をして祈っている。なみ子は「人がたくさんでて、父ちゃんの商売がうまくいきますように」と祈った。

寺のなかをしばらくうろうろすると、きく子が「なみちゃん、ちょっと家にいってみんな。ちゃんが浜から帰ってきてんと思うから、もっと小づかいを貰えるんだ。姉さま^{あね}人形を買いてえから……」といった。まだ市には早い時間なので、なみ子もきく子と一緒に一度家に帰ってみようと思った。

家に帰ると、母がたずねた。

「ああ、店はどこになった」

「いつものはしぎれ屋の隣だよ」

「そう、じゃあ、あとでいかなきゃあ」

きく子が父親から小づかいを貰い、なみ子をむかえにくるころ、母は父の手伝いに出かけていった。

なみ子は、きく子と二人で寺をめざした。寺の近くは人通りが多くなっている。寺の境内では大人が子どもにまじって歩いている。少しでも人より先にきて、いいものを買おうと集まっている。なみ子は寺の入り口でワタアメのくるくるまわっているのを見て、買おうか買うまいかと迷ったが、やめることにする。あとで、もっといいものを買おうと思った。

境内には隣町や川向うからも人が集まってくる。

「なみちゃん、カツ屋のじいさんからカツを買わないか」

「うん、そうだね」

なみ子は、カツ屋のおじいさんのカツをちょうど食べてみたいと思っていた。だから、きく子が「じいさん、カツくんね」といったのにつづいて、思いきってなみ子もカツを買った。カツ屋のおじいさんのピンとはった姿勢と気むずかしい様子をみると、なにか買いくい感じがする。

カツは三つほど竹ぐしについている。ソースもつけてくれる。